

かみのやま 歴史・文化財さんぽ

第45号（令和4年10月）

あゆむ「さあ、今日はどこの木かな？」
ミドリ「今日も2ヶ所で、まず、^{かんのんじ}観音寺だって。」
あゆむ「あの下大湯のところのお寺だよね。」
ふみお「そう、“湯ノ上^{ゆのうえ}観音”と言っている。」
あゆむ「確かに湯の上だね。そして、旗がたくさん立っているよ。」
ふみお「“南無^{なむ}観世音菩薩”とある。」



ミドリ「それから、“最上^{もがみさんじゅうさんかんのん}三十三観音”だって。」
文じい「“子^{ねどしれんごう}年連合御開帳”、つまり、観音様を見せてもらい拝むことができる年が、本当は2年前の“子”の年だったんじゃが、コロナ感染予防のため、寅年の今年になった。」
ミドリ「三十三観音というのは？」
文じい「観音様、つまり、観世音菩薩は、三十三の姿^{すがた}を持ち、人間に^{ぶつぎょう}仏教の教えを説いて、お救いするために^{へんしん}変身すると言われてる。」
ふみお「それで、33か所の寺の観音様をお参りして巡るわけだね。」
あゆむ「第十番という看板がある。ここの観音様が十番目ということなんだな。」
ミドリ「ほかに上山ではどこなのかしら？」
文じい「あと、高松^{たかまつかんのん}観音が第十一番じゃ。」
ふみお「“上山三十三観音”もあるんだよね。」
文じい「そう、上山三十三観音では、ここが一番となっておる。」
あゆむ「なんかえらいお寺なんだな。よし、右段^{いしだん}をのぼって行ってお参りをしよう。」

大慈院のさいかち

だ
い
じ
い
ん

観音寺のシラカシ

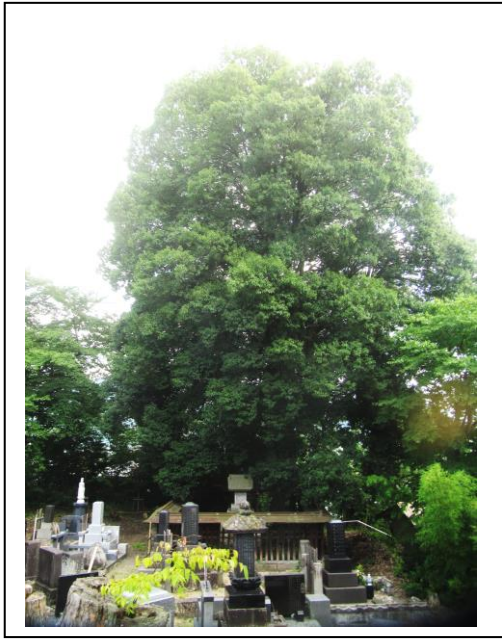
か
ん
の
ん
じ

ミドリ「^{おが}拝むとすがすがしい気持ちになるわね。ところで、今日はシラカシだったわね。」
文じい「ふむ、ご^{じゅうしよく}住職に案内をしてもらおう。」
ふみお「よろしく願いいたします。」
ミドリ「あれっ、これは・・・!。」



あゆむ「上がきられていてなくなっている。この木も何かあったんだ!」

文じい「ふむ、大雪で危険になって伐らざるを得なかったというわけだのう。でも、伐られる前の写真を持ってきておった。」



ふみお「すごい！この木も大きくて立派だったんだね。」

文じい「胸高の幹周り 3.6m、高さ 18m、推定樹齢250年以上で、県内でも最大級のシラカシと言われていた。」

ミドリ「それが、伐らなければならなかったのは残念だったわね。でも、子孫の木がそばから芽を出してきたのはうれしいことね。」

文じい「シラカシは、温かい地方に育つ木で、寒い北の方は山形あたりが限界らしい。」

ふみお「“北限”というわけだね。」

あゆむ「なるほど。そういうことを聞くとやっぱり残念だったな。それで、次の木は？」

ミドリ「中生居の大慈院のサイカチですって。」

あゆむ「サイカチ？」

ふみお「確か、とげのある木だったよな。」

ミドリ「あと、何か石鱈の木とかとも聞いたことがあったような・・・。」

文じい「ほほう、よく知っているな。サイカチはマメ科の植物で、豆の実をならせる。その豆を包む皮の“さや”を水につけて手でもむとつるつるの感じになる。」

あゆむ「それが、石鱈に？ おもしろいね。早く

見てみたい。」

ミドリ「さあ、着いたわ。ここね、大慈院。」

ふみお「“上山七福神 弁財天”と、“千体願かけ地蔵尊”という木札がさがっている。」

ミドリ「あ、七福神の弁財天というと、何か楽器をもっている女性の神様みたいだったよな・・・。」

文じい「弁天様とも言って音楽や芸術、財をもたらす女神じゃな。」

あゆむ「サイカチの木というのは、この門の前の大きな木だな。“大慈院のさいかち”という柱が立っている。」



ミドリ「大きいわね。」

文じい「胸高の幹周り 4.01m、高さ約 12m、枝張り約 10m、上の方で幹が二又に分かっている。推定樹齢は 330 年。」

ふみお「江戸時代からの木なんだね。」

ミドリ「でも、空洞があるわ・・・。」

文じい「確かに。しかし、これだけ立派に育っているのは、見守り管理が行き届いているのじゃろうの。これからも大切にしたいものじゃ。」

あゆむ「とげや実も見えるぞ。」

ミドリ「私、石鱈を作ってみようかしら。」

